

The Association of Heian Aristocratic Women with Gardens : The Front Garden of Isesyu

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 倉田, 実 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6160

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



平安貴族女性と庭

―『伊勢集』の前栽―

【キーワード】 寝殿造、植栽、和歌、宮仕、生活誌

はじめに

平安貴族邸宅となる寝殿造は、庭が必須のものとされていた。庭は主に寝殿南方に造作され、一般的には砂子を敷詰めた南庭（広義には、前庭全体を指す）・築山・池・池の中島・池に渡す橋・遣水と呼ぶ水路・遣水に設ける滝組・庭石（立石）・泉・垣根などが造作設置され、四季を彩どる樹木や草花が植栽されていた。一町に満たない邸宅などには、水にかかわる施設が不在の場合も多くあったであろうが、庭の植込みは、どの邸宅にも作られていた。樹木や草花が、言わば庭そのものと表象となり、平安貴族たちの生活に深くかわったのである。庭の植栽を考えることが、庭園史の重要な一画を担ってきたのは、このことによっている⁽¹⁾。

以下、ここでは樹木を含めて庭の植え込みを「前栽」としていききたい。用例的には、「松原・植木・前栽あり」（『うつほ物語』藤原の君巻・一五八頁）、「木立・前栽など、なべての所に似ず」（『源氏物語』夕顔巻・一四二頁）などのように、「植木（樹木）」と「前栽（草花）」

平安貴族女性と庭

倉 田 実

は分けられるが、一方では、「前栽なども小さき木どもなりしも、いと繁き蔭となり、一叢薄も心にまかせて乱れたりける」（同・藤裏葉巻・四五六頁）というように、樹木も前栽のうちとする場合もある。樹木と草花を共に前栽として扱っても問題はなからう。

さて、この小稿で考えようとするのは、庭の植栽、すなわち前栽と、平安貴族女性がどのように関わっていたかということである。女性たちは、自邸や宮仕先の前栽に気を配り、それを目にすることで日々の生活を慰めていたが、他にも様々な関わり方があった。この点を整理してみたいのである。

この史料となるのは、文学作品以外にはない。特に和歌や日記文学には、前栽に関わることが多く記され、歌に詠まれている。これらを総体的に扱うことは難しいので、ここでは十世紀前半に生きた女性歌人伊勢の歌集『伊勢集』から考えることにしたい。

伊勢は、生没年未詳だが、八七四〜八七七年頃に誕生し、九三八年時の詠歌が確認され、これ以降間もなく亡くなったと考えられている。この間、宇多天皇や、その後温子の宮仕女房として生き、宮仕するなかで、温子の兄弟仲平や時平、あるいは平中こと平定文などとかかわ

り、宇多天皇やその皇子敦慶親王との間には、それぞれ御子を儲けていた。

『伊勢集』には、よみ人知らずの古歌が混入した歌群（三七九、四四三番歌）もあるが、伊勢の生涯にわたる五百首近い歌が収載され、屏風歌などの公的な和歌のほかに、これらの人々や知人・隣人たちとの交友で詠まれた私的な和歌も多く含まれている。特に私的な和歌には前栽に関わる場合が多く、庭を考える際の恰好の史料になると思われる。以下、屏風歌・歌合・前栽合・菊合・花宴・賀歌・歌召などの公的な性格を持つ場合を除き、実際に庭の植栽と関わる詠歌を取り上げて、検討していくことにしたい。

なお、『伊勢集』は、三系統の本文に分類されるが、ここでは「私家集大成」収載のⅠ類本とされる西本願寺本によることにする。本文引用に際して適宜漢字を宛てたが、底本の表記はルビで示した。また、底本で意味が通じない場合は他系統などにより本文を校訂した。ルビが（ ）になっている場合は、底本の校訂であることをお断りしておきたい。他作品の引用は、新編日本古典文学全集本によった。

一 前栽作り

庭の植栽は、播種の他に移植による場合が多く、郊外に前栽掘りに出かけたり、贈答しあったりして手に入れていた。この場合は、根株ごと掘ったり、贈ったりしていた。このことは、「花の木も今は掘り植えし春立てば移ろふ色に人ならひけり」（古今・春下・九二・素性法師）、「人の前栽に菊に結び付けて、植えける歌／植えし植えば秋なき時や咲かざらん花こそ散らめ根さへ枯れめや」（同・秋下・二六八・在原業平）などのように詠まれており、前栽にまつわる風俗になっていた。こうした移植によって前栽が造作されるが、この他に前栽の回りに砂子を引いたり、秋になれば鈴虫・松虫などの鳴く虫を放して風情を増すようにしていた。『伊勢集』には前栽掘りのことは見えない

が、前栽作りに関わる歌は認められる。まず、こうした歌から採り上げることにする。

伊勢は自邸のほかに、宮仕先にも前栽を作っていた。このことが記された箇所からみることにしたい。前栽作りが中心になっているわけではないが、そのことが重要な位置を占めている。

- 1 後の御心限りなくなまめきて、世にたとへむかたなくなむおはしましける。この人の曹司に、前栽をかしう植ゑてなむ住みけるを、秋、里にまかり出でたりけるに、「などか今までは参らぬ。遅く参るめれば、曹司の松虫も鳴きやみ、花盛りも過ぎぬべし」とのたまはせれば、御返りに聞こえさする
まつ松虫も鳴きやみぬなるあきの野に誰呼ぶとてか花見にも来む（二八）

2 御返し

呼ぶとしも声は聞こえて花薄しのびに招く袖も見ゆめり（二九）

- 3 また、かく聞こえたてまつれる

人も着ぬ尾花が袖も招かればいとどあだなる名をや立ちなむ（三〇）

4 御返し

我が招く袖とも知らで花薄色変はるとぞ思ひわびつる（三一）

『伊勢集』は、一番歌から三二番歌あたりまでは、伊勢の半生を記す日記文学的な記述となっていて、伴信友はこれを抜き書きして注解を施し、『表章伊勢日記附證』を著わしていた。今日でも、これを受けて、先の部分を「伊勢日記」と解することが定説になっている。引用部は、温子との交流を記す部分になる。

伊勢は、宮仕先の温子のもとで、自身の曹司（局）に付属する蛩庭に、「前栽をかしう植ゑて」住んでいた。季節に応じた様々な花を植栽していたのである。伊勢の庭好きが窺われよう。御所の局に接する蛩庭は、女房の自由になって前栽が作られたことを示す史料となる。歌からすると、秋になれば前栽に秋草の花を植え、鳴く虫を放して、

秋の野の景色にしつらえたのであろう。宮仕先で慰めになるのは、こうして丹精した前栽なのであった。引用部は、長く里下がりしていた伊勢に対して、温子がその前栽をだしにして、帰参を促す展開になっている。

伊勢の長く里下がりした事情は、用例25の和歌で触れるように、伊勢を裏切った藤原仲平との関係に原因がありそうだが、ここははっきりとは分らない。帰参をためらう事情があったことだけは、以下の贈答歌ではっきりしている。里下がりが続くと、主人などが、女房の帰参を促すことは、『紫式部日記』や『枕草子』などにも記されている。良好な主従関係を維持するための配慮であらう。温子もこうした心遣いもあって、伊勢が好んだ前栽をだしにして、帰参させようとしたのである。これより遅く帰参すると、曹司の松虫も鳴きやみ、丹精して育てた秋草の花盛りも過ぎてしまいますよと言って寄せたのである。伊勢は前栽に松虫を放していたのである。わざわざのお言葉なので、伊勢は歌で返している。

1の歌は「人を待つ」という名の松虫も鳴きやむと伺っており、秋の野に、飽きられてしまったわたしは、いったいどなたが呼んでいるということの花見にでも出かけたらいのではありませんか」と詠まれている。「松虫」に「待つ」、「秋の野」に「飽き」を掛けたのである。温子の後宮では、飽きられ、うとんじられて私など誰も待っていないので、花見にはいきたくないというのであり、帰参したくない意を託したのである。伊勢に帰参をためらう深い事情があったことが知られよう。

伊勢の歌を見た温子は、その様子を察して、さらに呼びかけている。2の歌は、「呼んで」と松虫の声ははっきりと聞こえないけれど、花薄がひそかにあなたを慕って招く袖が見えるようです」としている。松虫の声が聞こえないというのは、周囲の取り沙汰などはないとした心遣いであらう。そして、「松虫」の「呼ぶ」声に代わって、人を「招く」とされる「花薄」が詠まれて、伊勢の帰参を心待ちしている

人がいるようだとしている。温子は自身の気持を他人事のように婉曲に表現して、伊勢を励ましたのである。薄が詠まれたのは、やはり伊勢が植栽したからであらう。

さらなる懇切な温子の言葉に接しても、伊勢の帰参をためらう気持ちは変わらない。再度、そのことを詠み贈っている。3の歌は、「人も着ないような尾花の袖に招かれて訪ねて行くものなら、わたしは、ますますいいかげんな女だ」という評判を立てることになるでしょう」としている。誰も期待しないような招きには、安易には応じられないというのである。

伊勢の気持ちなかなか直らないので、温子も再度、4の返歌をしている。温子は、「わたしが招いている袖だとも気づかず、あなたは花薄が心変わりすると思ひ悩んでいたのですね」と、とりなして説得している。2で「しのびに招く袖も見ゆめり」と温子が伊勢を招くのをあたかも他人事であるかのように詠じたのに対して、3で伊勢が「人も着ぬ尾花が袖も招かれば」と応じ、自分を招くのは人に顧みられぬ「人も着ぬ尾花」であるとしていなししていた。そこで、この4で温子は、「色変はる」「花薄」ではなく、招くのはわたしなのです、そのことをあなたは気づかずにはいたしたのでしたねとして、伊勢の帰参を促したのである。

この後の帰参は記されていないが、ここまで言われれば、伊勢はまもなく温子のもとに帰参したことであらう。里下がりした女房、帰参を促す主人という主従関係の贈答歌に、前栽が絶妙に利用されている。伊勢が丹精込めた前栽であったからこそ、こうした贈答歌になっていたと思われる。前栽作りは、女性たちにとっても、かけがえのない行為であったことも提示している。さらに次の用例に転じたい。

5 前栽植ゑさせたまひて、砂子引かせけるに、家人にもあらぬ人の、砂子おこせたらば
荒磯海^{ありそみ}の浜^{はま}にはあらぬ庭^{には}にても数知^{かず}られねば忘^{わす}れてぞ積^つむ (二二)

ここは庭作りの一環として、前栽作りと砂子敷きのことが記されている。詞書の敬語使用からすると、身分高い知人邸か、あるいは敦慶親王邸ということも考えられるが、これ以上のことは分からない。とにかく、「前栽植ゑさせたまひて」とあるように、前栽作りが移植から始まること、さらに前栽を取り巻く砂子も大切であったことが記されている。ここは前栽作りというより砂子敷きが中心になっているが、もう少し見ておきたい。

南庭の砂子は、白砂が好まれ、京郊外の白河砂が珍重されたが、地方から運ばれたことは、「同じ人、丹後に通ひしころ、橋立の砂子を得させたりしに／行き帰る道の頼りに後ろめた浜の真砂の数や知りにし」（赤染衛門集・一五二）と記されている。天の橋立の砂がわざわざ運ばれたのである。

南庭の砂の白さは、その家の威勢を表し、雑草などが混じると荒廃を意味したので、手入れされ、入れ返えられていた。この邸では、その砂子を家人でもない人がわざわざ贈ってくれたので、お礼として伊勢が歌を詠んでいる。主人に代わって詠作したのであろう。

歌は、「荒磯の海の浜ではないこの家の庭であつても、砂の数がはかり知れないほどでしたので、真砂の多い浜ではないことをつい忘れて、荒磯の浜と勘違いしながら、積み敷いております」としている。大量の砂であつたので、その多さで著名な「荒磯海の浜の真砂」を想起して、この庭がその浜ではないにしても、ついそのことを忘れて積み敷いてしまったとしている。「積む」は大量の砂を高く積み重ねる意だが、ここは、さらに敷き詰めることまで含んでいよう。砂子の計り知れない量に、贈ってくれた人の芳情の厚さを重ねて、謝意としたのである。また、庭が、無数の砂のある海浜のようになったという意を添えているのかもしれない。砂子敷きの現場に即した歌として貴重であらう。

6 鈴虫取りて、前栽に放つとて
いづこにも草の枕を鈴虫はここを旅とも思はざらん（二四二）

前栽に鈴虫を放つての歌である。先の1には、松虫を放ったことが詠まれていた。鈴虫と松虫は今日と逆であつたとされるが、ここでは触れない。鳴く虫を放つことも、先に触れたように前栽の風情作りに一役買っていた。秋になると庭を秋の野の風情にして虫を放っていたことは、『源氏物語』『鈴虫』巻にも語られている。鳴く虫を放てば、いつまでも鳴いていて欲しいと願うものであり、歌はそのことが詠まれている。すなわち、「どこに行つても草の枕をする鈴虫は、この庭を旅先とも思わないでほしいものです」としている。「鈴虫」の「す」は「草の枕をす」と言い掛けていよう。鈴虫は草に宿るので、草の枕を使う旅人によそえられる。しかし、この庭先を旅先と思わないでほしいとして、長く鳴いてくれることを願つたのである。秋の前栽には、鳴く虫が求められたのである。前栽作りの一端とならう。

二 前栽による隣家との交渉

家々で前栽作りがされると、隣家との交誼に一役かうことになる。続いて、隣家との前栽のやり取りに関わる歌を採り上げたい。

7 撫子のおもしろきを、隣へやるとて

いづこにも咲きはすれど我が宿の大和撫子誰に見せまし（二二〇）

美しく咲いた撫子（常夏）を隣家に贈ろうとして詠んだ歌である。伊勢は何度が転居しているので、この隣家に誰が住んでいたのかは分からない。しかし、すでに草花のやり取りはしていたのであろう。隣家の前栽に撫子がなかったから贈ったことになる。この場合、切花か根株ごとの、どちらとも考えられよう。撫子なども贈答されたことは、他にも「隣より常夏の花を乞ひにおこせたりければ、惜しみてこの歌をよみて遣はしける／塵をだに据えじとぞ思ふ咲きしより妹と我が寝るところなつ花」（古今・夏・一六七・凡河内躬恒）などで知られよう。

物を贈る際には歌を添えるのが作法なので、そのわけを詠み込むことになる。歌は、「どこにでも咲きはするでしょうけれども、我が家の大和撫子を、あなた以外の誰にお見せしましょうか」としている。どこにも咲くとして謙退して、我が家自慢を秘めてはいるが、風雅を解する隣家なら、この風情ある美しさを分かってくれるでしょうから、お贈りするのだと言うのである。歌の発想としては、「梅の花を折りて人に贈りける／君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞ知る」(古今・春上・三八・紀友則)と近いものがある。

風雅を解する人たちの間では、前栽に咲いた花々を贈答しあったのであり、隣家とは、こうして交誼を結んだのである。

なお、『伊勢集』には、伊勢に贈られたと判断される撫子にかかわる歌がある。伊勢邸の前栽ではないが、参考までに引用しておきたい。

8 撫子の多く咲きたる、右京の大夫

我が袖に移らば移れ手もやまず摘みや入れまし撫子の花(三四八)
9 こきかぎりことは摘み入れて撫子の移れる袖の色ぞ見せまし

(三四九)

右京大夫源宗千から伊勢に撫子が贈られたようである。本文や二首目の詠者で諸説のある、問題の多い歌であることだけ記しておきたい。

10 隣なる人の、そこに比べよとて、花をおこせたるに

春にさへ忘れにたる宿なれば色比ぶべき花だにもなし(二三三)
これも住人未詳の隣家との交渉である。隣人から、そちらの家に咲くのと比べて御覧なさいとして、花が贈られている。「花」は、歌に「春にさへ忘れ」とあるので、時節は冬の名残をとどめる早春のこととなり、梅花が相応しいと思われる。また、「色」が言われるので、紅梅になるかもしれない。そうすると折枝が寄こされたことになる。隣人は、「そこに比べよ」という、わざと挑発的な口振りで花を贈ってきた。伊勢の家にも同じ花が咲いていたのである。言わば「花合」を持ちかけて来たことになろう。その事情は不明ながら、隣人は伊勢に関心を持ち、自家の花を自慢するのにかこつけて、交誼を求めたことになろうか。

とになろうか。

一方の伊勢は、その誘いに直接は応じていない。歌は、「春にさえ忘れさられてしまっているこの家ですので、色のよしあしを比べられるような花さえもございません」としている。勝負を避けて、あっさり負けを認めたことになる。これが、花を贈ってくれた好意に対する謝意の一つのありかたとなろう。しかし、「花合」に応じない姿勢を示したことも明確である。そして、それは、隣人の自分に対する関心を逸らしたことになる。隣人は伊勢の氣にいらぬ男性であったのかもしれない。しかし、「春にさへ忘れにたる宿」とするところに、風雅に浸っては入れられない、何か悲しい事情があったことも想定できよう。

この伊勢の対応の仕方は、「常に消息遣はしける女友達のもとより、桜の花のおもしろかりけるを折りて、これ、その花に見比べよとありければ／我が宿のなげきは春も知らなくに何にか花を比べても見む」(後撰・春下・九三・小若君)などに通じるものがある。小若君は惟喬親王女であり、『後撰集』の左注には「父の皇子の心ざせるやうにもあらで、常に物思ひける人にてなんありける」とある。

この10の歌のあとには、「我をこそ忘れも果てめ梅の花咲きしぞとだに思ひ出でなむ」(『伊勢集』二二四)が位置している。Ⅲ類本には「かへし」とあるので伊勢歌への返歌となるが、前栽の贈答からやや離れているので、ここでは割愛したい。

11 隣の桜の花を見て、遣る

垣越しに見れども飽かず桜花根ながら風の吹きも越さなむ(三三四)

12 返し

桜花植ゑて我のみ見むとかは隣歩きも人やするとて(三三六五)
これも隣家との贈答歌である。この11・12と、この後に13・14として挙げる贈答歌については、前稿で扱っているので、詳しくはそちらを参照されたい。両贈答歌での伊勢の家は、三条になることも触れた

ので、ここでは、庭との関わりということから見ておきたい。

この隣人は、他本や『後撰集』によって、右大臣藤原定方五男で、延喜十年（九一〇）出生となる朝忠である。三十六歌仙の一人であり、伊勢とはすでに親しい交誼があったと思われる。だから伊勢は、隣家となる朝忠邸の桜花を称賛する歌を贈って交誼の挨拶をするのであろう。

歌は、「垣根越しに見ていても見飽きない桜の花、その木を根こそぎにして垣根を越えて、風が吹き寄こしてほしいものです」と詠まれている。当時、垣根越しに隣家の前栽を見て歌を贈ることは、それなりに行われていた。「堀河の院に住ませ給ふに、閑院の桜の花おもしろく見ゆれば、少将内侍／垣越しに見るあだ人の家桜花散るばかり行きて折らばや」（朝光集・五一）、「人の家の垣越しに見る梅が枝の花の盛りは君のみぞ見る」（高遠集・一〇一）などがあり、前歌の堀河院と閑院は隣同士であった。

前栽に関わる歌の趣向としては、隣家の桜花を「根ながら」風が吹き越させてほしいとするところにある。垣越しに見ているだけでは物足りないで、擬人化した風に、根こそぎこちら側に吹き寄こしてほしいと注文しているのである。風は花を散らすものだが、いっそのこと根こそぎ吹き寄せればいいと発想したのである。この発想のもとにあるのは、根株の着いた移植によって植栽された当時の前栽作りになる。

伊勢の贈歌に対して朝忠は、「桜花の木を植えたのは、わたし一人だけで見ようとしたからではありません。『隣歩き』をしてこちらに見に来ることも、あなたがするのではないかと思つてのことなのです」と素直に応えている。桜花を「根込め」でこちらの家に移植するのではなく、このままで「隣歩き」をして我が家にどうかお越しになつてご覧くださいとしている。伊勢の来訪を求めたのである。隣家の花を見に出掛けることが当時行われたからである。歌語としては珍しい「隣歩き」は、花を見に行くことになろう。

13 九月八日に、隣より菊に綿覆ひにおこせたりける、あしたに、
折^をりて遣^やるとて

数^{かず}知らず君が齡^{よはひ}を延ばへつつ名^なだたる宿^{やど}の露^{つゆ}とならなむ（四七

〇）

14 返し

露^{つゆ}だにも名^なだたる宿^{やど}の菊^{きく}ならば花^{あな}の主人^{しゅじん}や幾^{いく}代^よなるらむ（四七一）
隣^{りん}の住人^{ぢゆうじん}は、重^{おも}出^でする『後撰集』から、堤中納言藤原兼輔男の雅正（？～九六一）と知られる。朝忠の妹を妻としたので、三条の定方邸に住んでいたのである。雅正の父兼輔（八七七～九三三）、妻の父定方（八七三～九三三）は、どちらも和歌で名高い家であり、このことが歌に詠まれている。

ここは、重陽の節句の菊の着せ綿にちなんだ贈答歌である。隣家の雅正（あるいは朝忠妹）から、伊勢のもとに、「菊の着せ綿」を作つてほしいと依頼され、綿が寄こされたのである。重陽の日の前日に、菊花に覆った綿に香や夜露を移しとることを「菊の着せ綿」と言い、その綿で身をぬぐうと、老いを去り長寿になるとされていた。雅正は、重陽の節句という折を口実にして伊勢との交誼を求めたのであろう。あるいは、伊勢邸の露にあやかろうとしたのかもしれない。

この要請に対して伊勢は、重陽の日の朝に枝ごと折り取って「菊の着せ綿」を贈り、歌を添えている。歌は「齡の数の尽きることなくあなただ様の寿命を延ばし延ばしして、名門の家に榮えをもたらす菊の露となつてほしいものです」としている。「名門の家（名だたる家）」は、先に触れたように和歌でのそれになる。重陽の日にはふさわしい長命を寿ぐ詠みぶりである。隣家を優れた歌人を輩出している「名だたる宿」として称揚し、長寿をもたらす菊の着せ綿の露を絡ませたところが歌の趣向となっている。はかない露を肯定的にいう「露となる」とするのは珍しい語法である。

伊勢の好意に対して雅正はすぐさまお礼の歌を返している。歌は、「この露でさえも、置いたのが名門の家の菊でしたら、まして花の主

人であるあなたの寿命は、いったい幾代続くことでしょうか」として
いる。贈歌にあった「名だたる宿」は、雅正の住む家を指していたが、
この返歌では、伊勢の家に転換させている。雅正も、伊勢の名声をい
うことで応じたのである。「露」を宿す「菊」の持ち主は、着せ綿を
贈られたわたしにも比べて、どれほどの長命なのであるのかという
のである。露よりも、それを置く菊を上位に置いていよう。謙退の姿
勢を見せつつ、伊勢を賞揚したのである。わざわざ歌を添えて届けら
れた菊の着せ綿のお札であるが、依頼した以上の好意を寄せられたの
で、心のこもった返歌を見事に仕立てたことになる。

ここには、親密で雅やかな、前裁にかかわる隣家との和歌生活が窺
われよう。前裁は隣家との交渉に利用されるのである。

三 前裁を贈る歌

続いて、隣家以外に花々を贈る例を見てみたい。前裁の贈答の場合、
折枝・切花・根株ごとの三通りが考えられるが、まず樹木は折枝で、
草花は切花も根株ごとも考えられよう。根株ごと贈答したことは、す
でに触れた。遠く離れている人への挨拶には、四季折々の草木の折枝
に結ばれて贈られていた。「山桜を人に遣りはべるとて／君見よと尋
ねて折れる山桜古りにし色と思はざらなむ」(『伊勢集』・四五三)の
ように、山野などで折取った場合もあるが、特に断りがなければ自邸
の前栽を用いたことであろう。そして、その草木に託して歌が詠まれ
ている。

15 宮に

桜花あだに散らさぬことをだに我が心にもまかせてしがな(九四)
この「宮」は、温子か敦慶親王になるが、決め難い。温子ならば、
里下がりしていた折の無沙汰の挨拶となる。敦慶親王ならば、逢瀬
を求める歌になる。歌は、「桜の花を、せめてむだに散らさない
ということだけでも、宮様ばかりではなく、私の心にもまかせていた

だきたいものです」と詠まれている。とすると、明示されていないが、
桜の折枝に付されたとするのが順当になる。

歌の趣旨は、花は虚しく散るものだが、それでも咲いている間だけ
は宮様と共に見たいということであろう。一人だけで桜を賞味するよ
り、桜が散るのを自分の意のままにして一緒に見る機会を得たいと願っ
たのである。そこに、宮と共に桜の花を見られないことへのもどかし
さをこめ、さらに離れて過ごす寂しさをいうことになる。離れた人へ
の挨拶には、折枝にされた前栽の花々に託して心情が込められるので
ある。

16 宮に

もろともにをりし昔を思ひ出でて花見るごとに音ぞ泣かれける
(一一〇)

この「宮」も、15と同じく誰と決め難い。しかし、歌の措辞の「も
ろともに」は、「もろともにをるともなしに打ち解けて見えにけるか
な朝顔の花」(後撰・恋三・七一六)のように、恋歌で男女共にいる
親密な様子を言う場合が多いので、「宮」は敦慶親王になる可能性が
高い。

歌は、「あなたとご一緒に居て、二人で花を手折った昔を思い出し
まして、花を見るたびに、思わず声を上げて泣いてしまったことでし
た」と詠まれている。宮にお逢いしたいというのである。その思いが、
昔一緒に居た折に、二人で手折った花に託されている。その花と同じ
ものが伊勢の家に咲いたのである。それで懐かしい昔日が想起され、
折枝に歌が付されて贈られたことになる。前裁には、昔日の記憶が宿
るのであった。

17 里にはべりし折、花のいとおもしろきを、式部卿にたてまつる

とて
故里のあれてなりたる秋の野に花見がてらに來る人もがな(一四
八)

18 御返し

秋の野に我まつ虫のなくと言はば折らでねながら花は見てまし
(二四九)

式部卿宮敦慶親王との贈答歌である。16と同じように、里邸の前栽に咲いた花に託して、来訪を願った歌になる。この花は、歌からすると秋の花になるが、何かは分からない。返歌に「根ながら」とあることからすると、根株ごと贈ったのであろう。これも移植が多かった当時の反映となる。

歌は、「故里の荒れ果ててしまった秋の野には、飽きられて人の訪れもなくなっていましたので、花見のついでに来てくださる人が欲しいことです」と詠まれている。自邸の庭を、秋になると「野」の風情にする場合があったが、ここは「里はあれて人は古りにし宿なれや庭も籬も秋の野らなる」(古今・秋上・二四八・遍昭)を踏まえて、荒廢した庭の意にしている。共に、「あれて」に「荒れて」と「離れて」を掛け、「秋の野」の「秋」に「飽き」を響かせている。人の訪れの途絶えが、里邸の庭の荒廢となり、秋の野になるとするのである。そうした秋の野に咲く花を見て来て下さる人がいればいいものだとして、敦慶親王の来訪を願ったのである。秋草の花に託した親王を誘う閨怨の歌になっている。

この歌に対して敦慶親王は、伊勢の来訪を待つ意を汲んで、「待つ」と掛詞になる「松虫」を詠み込んでいる。「秋の野に人を待つ松虫が鳴いているように、わたしを待つてあなたが泣いていると言うのなら、秋草の花を折り取るまでもなく、松虫の音色を聞きながらあなたと共に寝して、根の付いたままの美しい姿を見たいものです」と詠み贈っている。

歌の趣向は、「ねながら」になろう。「松虫」の縁で「音ながら」、「花」の縁で「根ながら」、そして共寝の意の「寝ながら」というように三種が掛けられている。「松虫のねながらこそは女郎花我が都には引きて帰らめ」(弁乳母集・五)も、同じようになろう。中心となるのは「寝ながら」であり、「花」は伊勢になっている。恋歌において、

前栽の草木は「根ながら」から「寝ながら」を導いて、愛情の確認をするよすがになるのである。

19 我が家を人のなして後、花をやるとて

花の色の昔ながらに見ゆめれば君が宿とも思ほえぬかな(二二六)

家を手放した後、慣れ親しんだ家や花への未練・愛着を詠んだ歌である。伊勢が、住んでいた家を売却したことは、「家を売って詠める」/明日香川淵にもあらぬわが宿もせにかはりゆくものにぞありける」(古今・雑下・九九〇・伊勢)からも知られるが、同一の家かどうかは不明である。

詞書の通りに解すると、歌は、伊勢が新しい住人に花を贈ろうとして、「お贈りする私の新居の花の色は、以前住んでいた昔そのままに見えるようですので、とてもあなたの住居になったとも思われないことですよ」ということになる。住んだ昔を懐かしんで、新居の花を贈り、同一性を求めたことになろう。

しかし、『風雅集』には、「はやう住みはべりける家に人の移りゐて後、花を折りにやるとてよめる」となっている。これに拠れば、住み慣れた家を譲渡した後、その家の花を乞いに人を遣わした際に詠んだ歌ということになる。そうすると、「花の色は、わたしの住んでいた昔そのままに見えるようですので、花をいただきたく存じますよ」として、とてもあなたの住居とも思われないことですよ」となろう。こちらの方がより歌意が通じると思われる。

家を移ると、もとの家を強く思い出させるのは植栽であった。「久しう住みける家を住まじとてほかへ移るに、前に生ひたる松と竹とを残して／松もみな竹をもここにとどめおきて別れて出づる心しらなん／昨日今日見べき限りとまもりつる松と竹とを今ぞ別るる」(貫之集・八九四、八九五)、「年頃住みはべりけるところ離れてほかに渡りて、またの年の五月五日に詠める／今日も今日あやめもあやめかはらぬに宿こそありし宿とおほえね」(二二三・伊勢大輔)などであり、王朝

貴族たちは転居するにつけ、旧居の植栽を懐かしんで贈答を交わしたのである。

20 宿も狭に植ゑ並めつつぞ我は見る招く尾花に人や止まると(二四一)

21 花薄ほにも出でてしなき宿は昔しのぶの草をこそ見れ(二四七)

詞書がなく無関係に置かれた歌だが、この二首は関係があるらしい。『伊勢集』Ⅱ類本では、「人の許に花のいと高きを遣りたれば、忍ぶ草をなむおこせたりける」の詞書があって、21・20の順に並び、「返し」はないが贈答歌のようになっている。また、『後撰集』では次のようになっている。

人のもとに、尾花のいと高きをつかはしたりければ、返事に忍ぶ草を加へて／中宮宣旨

花薄ほにいつる事もなき宿は昔忍ぶの草をこそ見れ(後撰・秋中・二八八)

返し／伊勢

宿も狭に植ゑ並めつつぞ我は見る招く尾花に人や止まると(同・二八九)

『伊勢集』二四七番歌よりも『後撰集』二八八番歌の形が通りやすく、詞書もⅡ類本より丁寧なので、ここは『後撰集』によっていきなり。この形が本来であったと思われる。そうすると、右の「人」は中宮宣旨になり、伊勢が尾花(薄)を贈ったところ、忍ぶ草に添えて贈歌してきたので、それに伊勢が返歌したことになる。伊勢は、根株のついた尾花を贈ったのであろう。

尾花を手にした中宮宣旨は、「花薄が穂を出すような、表立つこともないわたしの家では、昔を偲ぶという忍草をひたすら見ております」と贈歌している。「昔」は、宮仕した頃になる。中宮温子の宣旨を勤めた女房らしく、『後撰集』雑二・一一二七番歌の詞書によれば、藤原時平の愛情を受けたことがあったらしい。華やかな宮廷生活を送っ

平安貴族女性と庭

ていたのであろう。だから、昔日を懐かしんで忍ぶ草を見ていると詠んだことになる。

「忍ぶ草」は、ウラボシ科のシダの一種、ノキシノブのことで、この歌のように「偲ぶ」に掛けて詠まれることが多い。『伊勢物語』一〇〇段に、「忘れ草をしのぶ草とやいふ」と男が問いかけられて、「忘れ草生ふる野辺とは見るらめどこはしのぶなり後も頼まむ」と詠んで応えたことが見える。「忘れ草」と「しのぶ草」は別種であるとしている。一方、同じ話でも『大和物語』一六二段では、「同じ草をしのぶ草、忘れ草といへば、それになむ詠みたりけると」とあって同種としている。別種であろう。

忍ぶ草を逆に贈られた伊勢は、「庭も狭くなるほどに植え並べては、私は見えています。人を招くという尾花に、どなたかが御覧になって立ち止まり、我が家を訪ねてくださるか」とと返歌している。ここに中宮宣旨に尾花を贈った理由も示されている。尾花は2の歌で触れたように、「招く尾花」であった。伊勢は、中宮宣旨にお訪ねいただいたいと伝えたことになる。中宮宣旨は昔日を偲ぶ様子を言い贈ってきたので、再度、この意を詠んだことになる。この歌は、前栽作りに関わるものにもなろう。

22 いとおもしろき桜を折りて、友のがり遣りたりければ、人

桜花色はひとしき枝なれどかたみに見れば慰まぬかな(三〇五)

23 返し

見ぬ人のかたみがてらは折らざりき君になずらふ色にしあらねば(三〇六)

前栽の花々は、恋人以外にも親しい人に贈られて、会いたい意が添えられていた。この贈答歌も同じである。「いとおもしろき桜」とあるのは、伊勢邸の前栽に咲いたものであろう。その折枝を「人」に贈って、花見に来ないかと誘っている。「人」は、歌で「色(容色)」が言われているところからすると、女性の友人になろう。

桜を贈られた友人は、早速返礼の歌を返している。友人の歌は、

「この桜の花の色合は、あなたと同じように美しくみごとな枝ですが、あなたの形見として別々に見ているので、心は慰まないことです」と詠まれている。ここでは、桜花の美しさと伊勢の美しさを「ひとしき」とすることで、伊勢の容色を称賛している。贈られたことだけでなく、贈った人を褒めることで、謝意が込められるのである。そして、みことな桜花を、あなたの形見としてではなく、一緒に見ることでできたなら、慰められるということになる。しばらく会ってはいなかったのであらう。会いたい旨を匂わせており、友好の情を込めた社交儀礼的な挨拶の歌となっている。

友人の歌は、伊勢の意にかなったものとなっていよう。そこで、伊勢もすぐさま返歌している。歌は、初句の「見ぬ人」は相手か自分か、また、四句の「君にならずらふ」には「身になぞらへる」の異文があり、どちらを採るかなどによって、解釈に揺れが生じている。ここは「見ぬ人」は、あなたが会えない人の意で、伊勢自身のこととして、次のように解しておきたい。すなわち、「お贈りした花は、お会いできないわたしの形見にするつもりで折り取ったものではありません。わたしは、お美しいあなたに肩を並べるような容色ではありませんので」と詠まれている。友人が伊勢の容色のことを誉めてきたので、伊勢は、桜花を自分の「形見」のつもりで折ったわけではありません、とてもあなたと肩を並べるような美しさでないのと謙遜して返したことになる。贈歌への返礼として、相手を褒めたのである。

桜花は、物語の世界だけでなく、その美しさによって女性の喩えになる。まして、自邸に咲くものなら、その女主人そのものと見られよう。だから、この贈答歌でも桜花は女主人の「形見」として詠まれるのである。

24 東宮の御息所の小箱合の頃、紅梅のつぼみたるを入れて奉るとて、後の宮

君にもし思ひかくれば鶯の花の櫛笥も惜しまざりける（三五七）
ここは、伊勢が紅梅の蕾を小箱に入れて贈った例である。「東宮の

御息所」は、温子のことで、他に例の見ない小箱合（実際は未詳）をしようとしたので、小箱だけでなく、そこに紅梅の蕾を入れて贈ったのである。

この「小箱」は歌に「櫛笥（櫛箱）」が詠まれているので櫛箱(4)になろう。そして、「小箱」とあるからには、櫛箱の身に納められる二十の小さな箱と思われる。『類聚雜要抄』『類聚雜要抄指図卷』などの図版に見られるように、櫛などは懸子に入れられ、身は四列と五列の二十に仕切られて、その数の小箱が納められた。櫛箱は甲乙一対で、甲の箱の身にはさらに釵子箱と差櫛箱、乙には鏡箱も置かれた。これらの箱は納箱となる。『類聚雜要抄』には、線彫りや透堀で、薄く軽く作るべきと記されており、こうした風情ある小箱が合わされたのであろう。

歌は、「あなた様は格別思いをお寄せしておりますので、鶯の訪れる紅梅の蕾を入れた小箱を差し上げますのも、まったく惜しくはございませんでした」と詠まれている。「惜しまざりける」とあるのは、直接には「櫛笥」を受けるが、紅梅の蕾を暗に含んでいる。自邸の蕾を折取って贈っても、惜しくはありませんでしたとなる。前栽の花は、蕾まで贈答に活用されたのである。なお、温子の返歌と思われる歌が続いているが割愛した。

四 前栽に書きつけた歌

『伊勢集』には、訪ねてきた人が、伊勢邸の紅葉や花に歌を書き付けて贈ったとする例が認められる。この場合、葉に直接書く場合と、歌を書いた料紙を結び着ける場合がある。『伊勢集』にはこの両例があるので見ることにしたい。

25 寛平の帝の御時、大御息所と聞こえける御局に、大和に親ある人さぶらひけり。親いとかなしくして、なべての男は逢はせじと思ひてさぶらはせけるに、御御息の御兄弟、いとねむご

ろに言ひわたりたまふを、いかがありけむ。

親いかが言はむと思へど、「さるべき宿世にこそあらめ、若き人頼みがたくぞあるや」とぞ言ひける。年経るほどに、その時の大将の婿になりけり。親聞きて、さればよと思ひけり。

女、限りなく恥づかしと思ふほどに、この男のもとより、女の親の家は五条わたりなるに、来て、柿の紅葉にかく書き付けたり。

26 人住まずあれたる宿を来て見れば今ぞ木の葉は錦織りける(一)
女いと心憂きものから、あはれにおぼえければ、

涙さへ時雨に添へてふるさは紅葉の色も濃さぞまされる(二)
と書きて、ねずみもちに付けて遣りける。九月ばかりのことなるべし。男も見て、限りなくめでけり。

引用は、「伊勢日記」の冒頭部で、この箇所は伊勢を裏切つて大将の婿となった仲平(御息所の兄弟)の訪問から始まって問題は多々あるが、ここは前栽に関してだけ見ることにしたい。

仲平は伊勢の様子が気になって、住んでいた親の家を訪ねてきた。直接門を叩くのは躊躇されるので、ひとまず「柿の紅葉」に歌を書き付けて贈り、様子を窺うことにしたのである。「柿の紅葉」は、底本「かきのもみち」なので、他本の「牆の紅葉」から「垣の紅葉」と解する説もある。また、直接紅葉に歌を書きつけたのか、折枝に結び付けたのかで解釈が分かれている。ここは、伊勢の実家にあった柿の紅葉に直接歌を書き付けたとしておきたい。

歌は、「わたしが通わなくなつてしまつて、荒れ果てているこの家を訪ね来て見ると、今まさに木の葉は紅葉の錦を織つて美しく色づいていたことだ」と詠まれている。「人住まず」は仲平自身が通い住みしなくなったことをいい、そのために「離れて」「荒れた」家になっているとしている。17の歌と同じである。そして、その家には錦葉よろしく紅葉が色濃く色づいていていたというのである。この紅葉には柿も含まれ、女そのものを表象している。美しい紅葉を目にしたという

ことで、女への賛嘆や未練、愛着を潜ませたのである。だから、柿の紅葉を折取つて歌を書き付けたことになる。

こうした仲平の行為や歌に、伊勢は「あはれにおぼえければ」とあるので、心動かされることがあったのであろう。自ら返歌を記している。歌は、「涙までが時雨に添い加わつて降る故里では、紅葉も血の涙で染まって、いちだんと色の濃さがまさっております」としている。時雨は紅葉を色づかせるものとされ、さらに涙まで加わつて濃さがまざっているとしているので、紅葉を暗示させている。それは、仲平の裏切りによって流されたものであることをいうことになる。非難する意を込めたのである。

伊勢は、歌を「ねずみもち」の折枝に結んで贈っている。「ねずみもち」は他本「ねすもち」だが、異称であろう。『本草綱目啓蒙』三二に、「女貞 ネズミモチノキ和名鈔 ネズモチノキ古歌 ネズミモチ京師」として概要を記している。今日ではモクセイ科の常緑低木ヒメツバキとも、モチノキ科の常緑低木イヌツゲともされていて、はっきりとはしていない。ここは、『枕草子』『花の木ならぬ』段に、「ねずもちの木。人なみなみになるべきにもあらねど、葉のいみじうこまかに小さきがをかしきなり」(九三頁)とあるのが参考になる。「人なみなみになるべきにもあらねど」は、他の木並に扱われるような木ではないけれど意であろう。この感覚があったとしたら、取るに足らない自己ということをやそえたことになる。また、「ねずみもち」は紅葉しないので、何らかの意味が込められていよう。ここは秋山虔氏の「目もあやなる柿紅葉のくれないにたいして、「ねずみもち」の常緑をつきつけた。そこには男の移ろいやすい心にたいして、変わらぬ節操を生きる女の心が主張されている、とみてよいのではなからうか。屈辱にたえつつも毅然たる姿勢を、伊勢はこの「ねずみもち」にこめたのではないだろうか」とする見解を支持しておきたい。

柿の紅葉に歌を書き付ける、それに対して雑木といつていい常緑の「ねずみもち」の枝に結んで返歌するというように、前栽の紅葉や常

緑樹が二人の贈答歌に深く絡んでいる。樹々が個別的な人間関係に応じて、様々に意味が付与されるのである。

27 帝、物におはしましけるついでに、桂なる家におはしまして、
その花に書きつけさせたまひける

梅の花香だに残らずなりにけり匂ひてだにや惜しまざりつる（二五〇）

28 返し

春霞立ちながら見し花なればふみとどめける跡ぞ嬉しき（二五〇）

一）

この帝は、宇多上皇で、どこかに御幸された折に、桂にあった伊勢の家に立ち寄った際の贈答歌になる。宇多上皇は、歌を桂邸の「花に書きつけ」て贈っている。この花は歌句から梅になるので、先の柿の紅葉のようにはいかない。他本には、「花にむすひつけさせ給へりける」「その花につけさせ給へりける」とあるので、一枝折取って、歌を記した料紙を結びつけたことがはっきりする。その意図は歌に詠まれている。

歌は、「梅の花は、香りさえも残さずに失せてしまったことよ。どうして、残り香を匂わせておくことだけでもして、惜しもうとしなかったのか」としている。散ってしまった梅の花に対する愛惜の念が詠まれている。しかし、折枝につけたことで、別の意味が添えられたことになる。詞書には「花に書きつけ」とあるので、折枝には咲いた残りの梅花がついていたはずである。梅花の盛りが過ぎて、わずかに花を残す頃になっていたのであろう。そこで、歌では、すっかり花が散り果てたことにして、花はともかくなぜ香だけでも留めて置かなかったのかと戯れたことになる。それは、せっかくの上皇の御幸を、伊勢はなぜ待っていなかったかと冗談めかして難詰したことにもなる。梅は、伊勢を表象したのである。訪問先の前栽は、その家の主人そのものだからであった。

この上皇自らの贈歌に対して、『伊勢集』では伊勢が返歌したこと

になっている。その歌は「春霞の立つこの時節に、お立ちになったまま御覧いただきました花なので、御幸の証跡として、御歌を賜りましたことが嬉しうございます」という意になる。上皇が梅の花盛りを過ぎたことを咎めるような歌を詠んだのに対して、伊勢は、それに直接応えることをしていない。ひたすら上皇の御幸に対する感謝を述べて、御製まで賜ったことを喜ぶ心情を率直に表明している。前栽が勲臣に供された栄を述べることに留めるのが礼ということになる。

この贈答歌は、一応筋は通せるが、しかし、贈歌では梅花が残らず散ったとされたのに、返歌では「春霞立つ」とあるように、これから開花する立春が暗示されている。上皇の歌がただしければ、伊勢の返歌とされる歌は、混入されたことも考えられよう。

五 前栽の花見

風情ある前栽は、12の歌にあったように「隣歩き」をしたり、遠くてもわざわざ花見に出かけたりすることも多かった。『伊勢集』には、伊勢邸ではないが、前栽の花見に関わる例が一例だけあるので見ておきたい。

29 亭子天皇、小野なるゆきよしが家に梅見におはしまして

思ひ出でて見に来ざりせば梅の花誰ににほひの香を移さまし（九二）

詞書ははっきりしないが、これは「亭子天皇（宇多上皇）」の歌ではなく、詠者は伊勢であろう。素姓は未詳だが、小野の「ゆきよし」邸への、梅見の御幸に扈從した伊勢が、宇多上皇の嘉賞の榮に浴した主人の慶びに寄せた歌と考えられよう。前栽の梅花を花見に訪れた際の歌となる。歌は、「この家の梅を思い出されて見にいらっしやなかったならば、梅の花はいったいどなたにこうばしい香りをお移したことでしょうか」として、御幸の光榮を詠んでいる。主人「ゆきよし」の代弁ともなっている。梅花は宇多上皇以外の誰にも香は移さ

ないとして、上皇を称えることにもなっている。

六 物思いを誘う前栽

『拾遺集』『哀傷』には、「娘にまかり遅れてまたの年の春、桜の花盛りに、家の花を見ていささかに思ひをのぶといふ題を詠み侍りける」という詞書のもと、藤原実頼・平兼盛・清原元輔・大中臣能宣・藤原延光の五首の歌が並んでいる。「家の花を見ていささかに思ひをのぶといふ題」とあるように、家の前栽を見て思いを託すということが、すでに歌会の題になっていた。前栽は賞味されるだけでなく、物思いの所在をはっきりさせ、また、誘うものであった。最後に物思いに関わる前栽を見ていきたい。

30 女、里にて、前栽のをかしかりけるを、手すさびに尾花を結びたりけるを、はじめの人の見て

花薄我こそ深く頼みしかほに出てて人に結ばれにける（九）

「伊勢日記」からで、詞書は前半を割愛した。里下がりしていた伊勢は、前栽に植えられていた尾花を手すさびするように結んでいた。

「手すさび」に物思いの所在が暗示されている。「結ぶ」のは、そこに呪力や霊力を封じ込め、前途を祈る呪術であった。また、男女が互いに相手の衣の下紐を結ぶことで再会を期すのもこの呪術に類するものであろう。結ぶは結婚の意にもなっている。伊勢が手すさびに尾花を結んだのは、直接こうした呪術に繋がるものではなく、群れて咲く穂の出た尾花を、乱雑になったり、風に倒されたりしないように束ねようとしたからだと思われる。尾花を結び束ねたことは、「秋、醍醐の御時に、御前の薄の結ばれたるを御覧じて、あれは誰が結びたるにかと、おほせられければ／ほころびて招くけしきと見えしかばしどけなしとて我ぞ結びし」（公忠集・九）などで知られる。もしかしたら、伊勢はこの歌に詠まれたように、一群の尾花が乱れて人を招くように見えたので、思わず結び束ねようとしたのかもしれない。ここは、枝

平安貴族女性と庭

を一つ取って、それを結んだのではないだろう。悲恋の物思いの続く伊勢に、男を招くような姿の尾花が「しどけなし」と映って、束ねようとしたとしておきたい。伊勢の物思いと、前栽が関わるのである。

伊勢のこの様子を見た「はじめの人」とされる仲平は、呪術的な意味や、兄時平と関係した意で歌を詠みかけている。「花薄は、このわたしこそが妻にしようと思ひ頼りにしていたのに、穂に咲き出て、はつきりと他の人と結ばれてしまったよ」としている。ここでは「花薄」が伊勢のことになり、時平と結ばれてしまったと憶測して恨んだのである。

尾花は、結ばれたりされる植物であった。その結ぶという行為が、人によって違った意味で捉えられたのである。

31 春、物思ひける頃

桜花にほふともなく春来ればなどかなげきの繁りのみ増す（一二）

詞書にあるように、物思いと前栽の桜花が関わる歌になる。詠まれた桜花は、前栽のものであろう。しかし、自邸か宮仕先かは不明だが、どちらでも構わない。時節は桜の花盛りから、草木が芽ぶいて次第に繁ってくる頃であろう。歌は、「桜の花が美しく咲き映えるということもなく、春がやって来ると、どうしたことか、嘆きの木の葉の繁りばかりが増すことだ」と詠まれている。物思いの続く伊勢には、「桜花にほふともなく春」が来たと思えている。春は桜花爛漫の季節のはずだが、物思いに虚ける心には、花の色も映えて見えないというのである。「桜花」は、伊勢自身の心情が投影されて見られている。伊勢には、こうした桜花よりも、木の葉が生い繁る様が気に障り、嘆息を誘うものとなっている。前栽の光景は、見る人の心象の暗喩となつて、ここでは、桜花がはえず、草葉が木暗く生い繁るさまが、そのまま伊勢の心情の表象となっている。

32 置く露を何飽かずとていたづらに涙をさへも流し出づらむ（二五六）

異文の多い歌だが、この形で見ておきたい。詞書ないので何とも言えないが、この歌は、憂愁の思いに沈む伊勢が、前栽の草葉に置いた露を見て詠んだものであろう。歌は、「草葉に置く露を、どうしてそれだけでは物足りないといつて、むなしく涙までをも流し出しているのだから」と詠まれている。「露」は草葉に置くもので、涙の連想や比喩に用いられる景物であり、ここは、伊勢が、前栽に置く露を見て、自身の悲哀の涙と重ねているのであろう。その涙は、恋の物思いのせいなのか、宮仕に関わる悩みのせいなのかは分からない。「いたづらに」には、物思いによって無為に過ごす様が潜められているよう。里下がりとしての感懐なのかもしれない。前栽に置かれた露は、涙を誘うものでもあった。物思いは、おのずと前栽に視線が向けられ、その所在を実感させるのである。

おわりに

以上、庭の前栽に視点を置いて、『伊勢集』からそれに関わる歌と想われる用例を見てきた。各節の表題に示した「一 前栽作り」「二 前栽による隣家との交渉」「三 前栽を贈る歌」「四 前栽に書きつけた歌」「五 前栽の花見」「六 物思いを誘う前栽」というような形で、前栽は多様に伊勢と関わっていた。一覧して分かるように、前栽にかかわる和歌は、多く社交的な場で詠まれていた。「一 前栽作り」にしても、宮仕先とかかわり、「五 前栽の花見」も宇多上皇のものであり、私的であるよりも、半ば公的なものであった。宮仕する女性としての社会的な立場によって、前栽もこうした場で活用されたのである。逆に言えば、前栽にしても社交的な面が際だって認められたことになる。私的な面とかかわる「六 物思いを誘う前栽」として挙げられる用例は、少ないのである。

この一方、『蜻蛉日記』のような、宮仕経験のない女性に目を転じると、前栽はより個人的になり、「六 物思いを誘う前栽」の用例が

多くなっている。特に、『蜻蛉日記』では夫婦間の関係性とかかわっている。日常的实际的な生活感覚というようなことが、『蜻蛉日記』では、『伊勢集』よりも大きな比重が認められるのである。この点については別稿を参照されたいが、この相違にはさらに和歌文学と日記文学というジャンルの違いもあることにはなる。この点はさらなる課題としておきたい。

『伊勢集』に関しては、以上の他に、前栽と関わらない四季折々の植物を詠んだ歌も多く認められる。いかに植物が王朝貴族たちと関わったかが、改めて確認されるのである。これらの中で、前栽の歌は、寝殿造の庭の問題にかかわるだけでなく、王朝貴族の生活誌を明らかにする史料にもなると思われる。

注

- (1) 庭の植栽に関しては、飛田範夫『日本庭園の植栽史』（京都大学学術出版会、二〇〇二年二月）、仲隆裕「庭園史からみた王朝文学——寝殿造庭園における植栽——」（倉田実編『王朝文学と建築・庭園』平安文学と隣接諸学1、竹林舎、二〇〇七年五月）、武田早苗「前栽の風情——平安時代の和歌文学から」（同前）など。
- (2) 拙稿「六条院の改修」（『研究講座源氏物語の視界 4』新典社、一九九七年五月）。
- (3) 拙稿「歌人伊勢の家とその交遊関係——朝忠・雅正・清正・敦忠など——」（『大妻女子大学紀要—文系—』41、二〇〇九年三月）。
- (4) 櫛箱については、拙著『王朝の恋と別れ』（森話社、二〇一四年一月）参照。
- (5) 冒頭の紅葉については、淵江文也「鼠鱗のみみち」（『親和国文』14、一九七九年十二月。後、『源氏物語の美質』桜楓社、一九八一年に所収）、藤岡忠美「伊勢集序説——伊勢日記冒頭歌覚え書き——」（神戸大学文学部『国文論叢』10、一九八三年三月。後に、『平安朝和歌 読解と試論』風間書房、二〇〇三年に所収）など。
- (6) 秋山虔『伊勢』（ちくま学芸文庫、一九九四年九月）。五七頁。

(7) 拙稿『蜻蛉日記』道綱母と前裁——平安貴族女性と庭——」(『大妻国文』47、二〇一六年三月)。

〔付記〕『伊勢集』の解釈などは、秋山虔・小町谷照彦・倉田実『伊勢集全注釈』(角川学芸出版、二〇一六年一月刊行予定)に依拠している。刊行の際は、併せて参照されたい。